

リュック1杯からのスタート

八木で初めて花火が打ち上げられたときの話を、当時から深く携わってこられた川勝一平さん（衣服リサイクル店「川定」店主）にお聞きしました。

八木の花火を第1回から打ち上げてきた「國友銃砲火薬店」の國友家とつちは親戚関係になります。

終戦後、軍隊から帰ってきた私や商店街の若い者で「八木のまちに花火を上げよう」と盛り上がり、私の妹が國友の当時の社長（國友藤一先代社長）に嫁いでいたことから、その弟で花火師の國友藤策氏が来てくれることになりました。

藤策氏は私と同じ年で、当時は24か25歳くらい。たった一人で、リュックサックを背負い、車でやって来ました。リュックには3号玉や5号玉を20発ほど、打ち上げ用の筒を担いで、今では考えられないことです。

知らせを聞いて河原には大勢の人が集まっていました。私は筒のそばで耳栓をして藤策氏の助手役。第1発目の花火が火の粉をあげて空に昇り、ドーンと広がった瞬間、河原からは大歓声があが



りました。本当に、周りが一瞬にして明るくなりました。今から思うと懐かしいです。

それ以来、毎年花火が上がるようになり、楽しませてもらっています。

いろんな年がありました。良い花火を上げるためには、みんなの心が一つにならなあと感じますね。役員さんには大変な苦勞もありますが、これからも盛大な花火が続いていくことを期待しています。

南丹市商工会を中心に

「南丹市やぎの花火大会」には、毎年7万人を超える来場者が南丹市に訪れます。

主催するのは、南丹市商工会。市内の旧町ごとにあった4つの商工会が、今年4月に合併してひとつになりました。昨年まで共に主催を担ってきた南丹市は、商工会の合併を機に、今年から後援団体

八木の花火の歴史と伝統を受け継いで

平成4年から平成20年3月までの16年間、旧八木町商工会の会長を務められた國府初雄さん（八木町観音寺）。現在、京都府商工会連合会会長を務められています。

八木町商工会の会長を務めるということは、歴代会長が築いてこ

られた花火大会の歴史と伝統を受け継ぐということ。絶大な責任を感じました。特に平成8年は、第50回目、八木町合併45周年という記念すべき年で、「今までにない花火を」という周りの期待も相当大きかったです。あいにく台風の余波で、やむを得ず8月14日から18日に延期になったものの、関係者や多くの人々の心が一つになって盛大に開催できた年でした。

この8月14日という日は、大変

として参画。新たな体制で迎えた、大きなイベントです。

原油や原材料価格の高騰などによる業況の悪化、新体制での取り組みということで、昨年同様の規模で開催ができるか、商工会関係者に大きな心配がのし掛かりました。しかし、「なんとか続けては

重要で、その日に合わせて里帰りされる方々の期待に応えるために、毎年、少々雨が降っても、可能な限り14日に開催しています。

市が合併して範囲が広くなりましたが、花火への協賛の輪が広がるのはなかなか難しく、また今年には商工会の合併もあり、役員らは歴史と伝統を守り続けるのに大変苦勞をしたようです。

大堰川に映るロケーションに、最後のファイナレは京都府随一とも言われ、本当に見ものです。この花火大会が、皆さんの誇りとなり、いつまでもつながっていくことを願います。



しい」と強く待ち望む住民や、市内外からの声に励まされ、商工会役員が一丸となってスポンサーや協賛の確保に駆け回られました。

そして実現したおよそ7,500発の花火……。きらめく大輪の花の裏側には、並々ならぬ関係者の努力が秘められています。